

奈良・平安時代の土師器甕について

～大毛池田・沖遺跡出土資料を中心に～

永井宏幸

1 はじめに

尾張古代の土師器研究は近年まで遅々として進展がなかった。1991年の城ヶ谷和広氏による「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」でようやく編年の大綱が提示された。研究が進まなかった要因は、氏が指摘するように、当該期の発掘調査が集落遺跡より窯跡や古墳の調査が多く、いきおい須恵器・灰釉陶器の研究が中心となったからであろう。しかしながら、近年、清洲城下町遺跡・大洲遺跡・名古屋城三の丸遺跡など良好な一括資料とともに、土師器の出土例が急増し、氏のような論考が提出されるようになった。

城ヶ谷氏は尾張の土師器甕を基軸に6世紀後半から11世紀をⅣ期9小期に分けている。Ⅰ期（6世紀末～7世紀後葉）は、畿内とのつながりが指摘できる尾張・美濃・三河・伊勢地方に多い甕、すなわち口縁端部をつまみ上げ、口縁部から体部内面を横方向のハケメで調整し、内面下半部をヘラ削りする「東海型」甕の出現としている。Ⅱ期（7世紀末～8世紀）は、小平底で極めて長胴、口縁部を「く」の字状に折り返し、体部外面を斜めから縦方向の荒いハケメで調整し、体部内面はナデやケズリで薄い器壁に仕上げる甕を特徴としている。またこの時期、Ⅰ期において「東海型」として大きく捉えることができた甕を、Ⅱ期は「東海型」を継承する「伊勢型」、口縁部を鋭角に折り返す、ハケメを全く持たない甕を「三河型」など「某国型」の長胴甕を生み出す時期としている。Ⅲ期（9世紀）はⅡ期の甕と「三河型」に系譜をもつ「清郷型」甕が加わる過渡的な時期としている。Ⅳ期（10～11世紀）は、長胴甕が見られなく

なり、鍋的な甕が中心となり、「伊勢型鍋」の系譜上最も古いタイプに位置付けられる、球胴形の体部と内面に折り返す口縁端部を特徴とする甕が主体となる時期としている。

以上、城ヶ谷氏の論考のうち、特に画期として特徴的な部分を抽出した。

そこで、小稿では過去の調査事例が少ない尾張北部に位置する大毛池田・沖で出土した土師器甕を中心に、7～10世紀の様相を考えてみたい。

2 大毛池田・沖遺跡の概要

両遺跡は愛知県の北西部、一宮市北部と葉栗郡木曽川町にまたがる木曽川水系によって形成された自然堤防およびその後背湿地上の標高約9m前後に位置する遺跡である。池田遺跡は古墳時代前期の水田跡、古代・中世の集落跡と中世末の居館跡が確認されている。沖遺跡は遺跡の北東から南西へ縦断する旧河道を中心に古代・中世の集落跡が確認されている。

今回対象とした7世紀から10世紀にかけては、池田遺跡が「美濃」刻印須恵器が出土した溝を含め遺跡の北東から南西へ続く溝が数条、竪穴住居が17棟確認されている。土師器甕は溝資料の中に多く含まれ、竪穴住居からの出土例が少ない。一方沖遺跡では、竪穴住居が22棟確認されている。土師器甕も比較的多く竪穴住居から出土している。

これらの資料をもとに7世紀から10世紀にかけての土師器甕の変遷を試みる。

3 分類

大毛池田・沖遺跡から出土した土師器甕を口縁部形態を中心に大きくA～E類に分類する。

A類 体部が球形で小型のもの。口縁端部をつまみ上げるものが古相、そうでないものが新相。

基本的にはB類と同様なものが古く、D類と同様なものが新しい。尾張低地部に特徴的な甕。

B類 体部が球形あるいはやや長胴ぎみで中型のもの。底部は丸底。口縁端部をつまみ上げる。新しくなるにつれ、つまみ上げが小さくなり、やがて痕跡程度となる。調整手法は口縁外面に強い横ナデを施し、凹線状となる。頸部から肩部にかけても横ナデを施し、肩部和体部の境目に稜線が入る。新しくなるにつれ、稜線がなくなり、頸部から肩部にかけての横ナデが弱くなる。口縁部内面は横方向ハケ調整、あるいは後に横ナデを施すも

のものもある。体部内面は横方向の細かいハケ調整。体部下半に底部から上に向けて板ケズリを行うものが古い。

C類 体部が長胴で大型のもの。口縁部・その他の調整手法はほぼB類に共通する。ただし、肩部と体部の境目の稜線は新しくなっても残る。

D類 体部が長胴のもの。口縁がくの字あるいは水平に折れ曲がり、肥厚する。底部は平底。体部の調整は器壁を荒々しく削るようなハケ調整が施される。

E類 他のものに比べ肩部が張り、全体的に鍋的な器形のもの。口縁端部を内側に折り曲げる。

その他、上記の分類以外に、把手付の鍋・甕、従来「清郷型」甕とよばれているものがあげられるが、今回は分類から除外した。

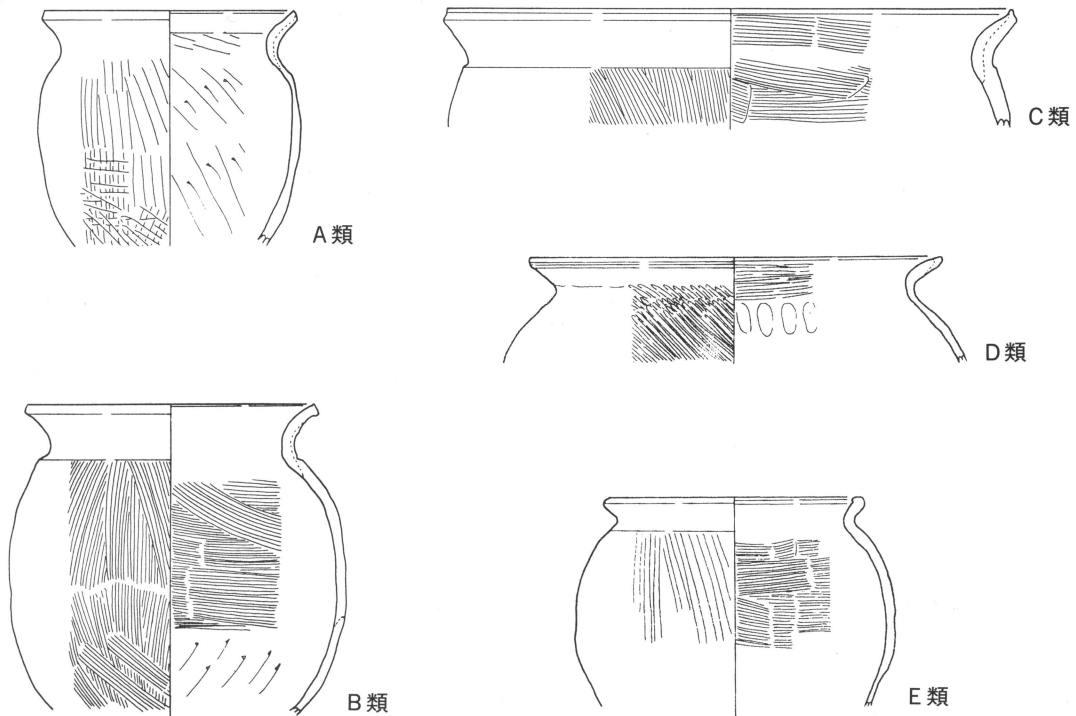


図1 土師器甕分類図 S=1/4

4 段階設定

大きく5分類したものとそれぞれの型式変化、および須恵器・灰釉陶器の共伴関係などから、今回は5段階に区分する。時期設定としなかった理由に、資料が整理中であることと、次年度以降刊行予定の報告書に向けての試案としたためである。

第1段階

池田遺跡94C区S D03・94D区S D15があげられる。共伴する須恵器は猿投窯のI-17号窯期併行である。口縁部をつまみ上げるタイプのA・B・C類が主体となる。

遺物を詳細に見てゆくと、口縁部のつまみ上げが徐々に緩くなる段階である。また、体部外面のタテあるいはナナメ方向のハケ調整の後に行う頸部のヨコナデ調整が、徐々に弱く行うようになり、肩部から胴部にかけての稜線が目立たなくなる。内面の調整手法は基本的にはヨコハケ調整で、古い様相として体部下半に底部から体部にむけてケズリ調整を行うものもある。

以上、第1段階はA・B・C類ともに同じ様相がみられ、口縁部をつまみ上げるタイプ以外のものは、ほとんどみられない。

第2段階

池田遺跡93B区N R02・沖遺跡94C区S B06・07があげられる。共伴する須恵器は美濃須衛窯の第Ⅳ期第1小期のものが主体となり、若干猿投窯のC-2号窯期のものが伴う。

池田遺跡N R02資料は94年度調査から美濃刻印資料が出土しており、実年代が確認できる良好な資料といえよう。ただ、部分的にH-50号窯期に遡る資料がみられるが、土師器甕資料は現状では古い様相を示すものはない。

第1段階に引き続き、A・B・C類が主体となるが、次段階に主体を占めるD類が出現する。

A類は外面のハケ調整が荒く粗雑なものが含まれる。B・C類は口縁部のつまみ上げがほとんど

見られなくなり、口縁が大きく開くものが増える。また、胴部形態が球胴から長胴化の傾向がみられる。D類は口縁端部を弱く面取りを行う。外面のハケ調整は、B・C類に比べ単位が短い。また、色調がB・C類は赤褐色や淡黄褐色のものが主体であるのに対して、D類は暗褐色～褐色のものが主体となる。

以上、基本的には前段階の退化現象で捉えることができるが、新たにD類が出現することが画期として重要となろう。

第3段階

沖遺跡93A区S B06・07資料があげられる。共伴する須恵器・灰釉陶器は猿投窯のO-10号からK-14号窯期のものが伴う。S B06と07は切り合い関係があり、S B06→07の順である。両者の出土資料は、S B06がほとんど土師器甕であるのに対して、S B07はほとんど須恵器・灰釉陶器である。出土位置・層位の詳細な検討は行っていないが、おそらくS B07のO-10号窯期のものはS B06に共伴する資料であろう。

この段階はB・C類に代表される口縁部をつまみ上げるタイプは見られなくなり、D類が主体を占める。D類は胎土が特徴的で、前段階までに比べ砂粒を多く含む。外面の荒いハケ調整や内面のケズリにより、体部の器壁薄く仕上げる。口縁部の特徴からさらに3段階区分が可能である。すなわち、口縁端面面取りなしで「く」の字口縁→面取りなしでほぼ直角に折り返す口縁→面取りありで「く」の字口縁への変化である。A類はD類と基本的に同様な特徴を示す。

第4段階

池田遺跡94F区S B10資料があげられる。共伴する灰釉陶器は猿投窯のK-90号窯期と美濃窯の光ヶ丘1号窯期のものが伴う。

第3段階の新相で見られる口縁端部を面取りするもので、さらに頸部と体部の境目に稜線が入る

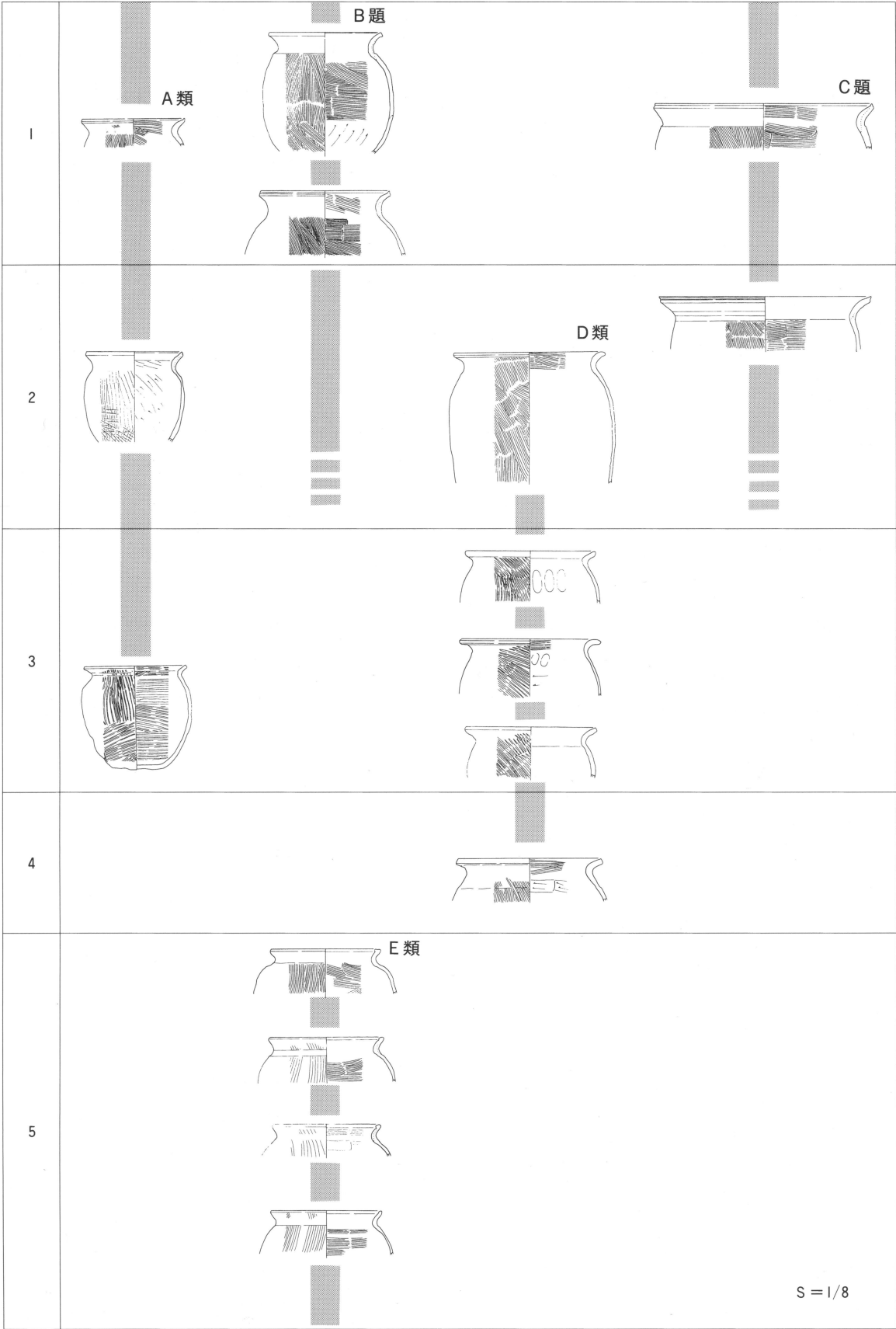


図2 土師器甕変遷図

タイプが主体となる。体部外面のハケ調整が再び細くなる。

第5段階

沖遺跡94F区S B01～03資料があげられる。共伴する灰釉陶器は美濃窯の光ヶ丘1号窯期～丸石2号窯期のものが伴う。その中で量的には虎溪山1号窯期が多い。

この段階はE類が主体を占める。口縁端部を内側に折り返すもので、将来的にはさらに4段階区分が可能である。すなわち、口縁端部に強いナデ調整を行い面取りをする→面取りなしで、体部外面の最終調整が少し間隔をおいたタテあるいはナメ方向のハケ調整→口縁端部の折り返しがさらに内面に入り込む→口縁端部の折り返しが痕跡程度への変化である。

以上5段階の区分を試みた。

さて、これまで示してきた段階に実年代を当てはめてみると、確実な資料としては、第2段階の「美濃」刻印須恵器が出土した溝の延長上に位置する、池田遺跡93B区N R02資料のみである。「美濃」用字から制作時期が708～720年前後と考えられる。他の段階についてはそれぞれ共伴する須恵器・灰釉陶器の編年に当てはめることにする。

第1段階はI-17号窯期が7世紀半ば～後葉。
第2段階は「美濃」刻印須恵器から8世紀前葉。
第3段階はO-10号～K-14号窯期が8世紀後葉～9世紀半ば。
第4段階はK-90号窯期と光ヶ丘1号窯期が共伴する9世紀後半。
第5段階は光ヶ丘1号～丸石2号窯期が9世紀末～11世紀初頭。

さらに、これらの実年代と比定した各段階と城ヶ谷氏の編年を照合すると、第1段階はII-3期、第2段階はII-1期、第3段階はII-2・3期、第4段階はIII期、第5段階はIV-1期となる。

5 課題と展望

今回の段階設定はさらに細かな段階区分が可能である。まず、この点に関して再度整理し、第1の課題とする。

第3段階の主体をなすD類が口縁部の変化と調整手法から、さらに3小段階区分できる。①口縁端部面取りなし+「く」の字口縁、②口縁端部面取りなし+ほぼ直角に折り返す口縁、③口縁端部面取りあり+「く」の字口縁への変化である。城ヶ谷氏の編年に当てはめるとII-2・3期が3区分可能となる。

第5段階の主体をなすE類は4小段階区分できる。①口縁端部の面取り、②面取りなしで、体部外面のハケ調整が間隔をおいて行うもの、③前段階を継承し、口縁端部の折り返しがさらに内面に入り込む、④口縁端部の折り返しが痕跡程度になる。城ヶ谷氏の編年に当てはめるとIV-1期が4区分可能となる。

第2の課題としては、7世紀末に三河で出現する口縁部を鋭角に折り返す、ハケ調整のない甕の有無である。現状では今回分類したA～E類には共伴していない。城ヶ谷氏の編年ではII-3期からIV-2期まで共伴する。沖遺跡では包含層資料の中に10世紀代のものは出土しているものの、それ以前に相当する第4段階以前は現在確認できない。あるいは尾張北西部の特色を示す事象か。

第3の課題としては、底部形態の変化である。第1段階まで確実に丸底で、第3段階は平底であることは確認しているが、第2段階が不明である。今後の検討課題としたい。

第4の課題としては、他の煮炊具である鍋・甕との共伴関係関係である。鍋に関しては、第1段階の直前にあたる6世紀末から7世紀初頭の須恵器と共伴することが確認できる。それ以降継続するかは不明である。また、把手部分は第1段階から第3段階まで量的には少ないものの確認でき、

甗の存在は想定できる。さらに、第2段階から第3段階にかけて須恵器の甗も相伴している。

第5の課題としては、土師器供膳具の有無である。相伴関係は確認できないが、平城Ⅱ式に相当する搬入品の暗文土師器が出土している。おそらく第2段階に伴うものであろう。このような現象は尾張で一般的であるが、出土頻度、出土遺跡による相違あるいは時期的な問題に関して、城ヶ谷氏が指摘する「律令体制における土師器のもつ意味」などとあわせて検討が必要である。

第6の課題としては、煮炊具の使用法である。まずは、外内面に残る2次焼成痕やススなどの付着位置での確認である。これらの痕跡に関する研究は外山政子氏の研究が参考となろう。ただ、カマドに代表される加熱施設は尾張では遺存状態が非常に悪い。特に第3段階以降は焼土と炭化物が集中する場所が床面に見つかる程度である。

この第3段階の遺構として比較的遺存状態が良い沖遺跡の例を紹介する。

93A区S B07

出土遺物から8世紀後半の竪穴住居。焼土が集中するなかに、角柱状の石が立位し、その上に須恵器碗が伏せた状態で出土。

93C区S B?

調査区南端のトレンチ内から角柱状の石が立位し、その周りを囲むように土師器甕(8世紀後半)が口縁部を下に、体部下半を欠如した状態で出土。

前者の例は須恵器碗の底部の平坦面を利用し、その上にのせる工夫がされている。後者の例は上端面が平坦な角柱状の石が支脚となり、土師器甕が枠と考えればやはりその上にのせられる工夫がされている。両者に共通することは、床面から少し高くした空間を平坦面にしていることである。したがって、造付カマドの簡易施設として8世紀以降も継続している。

なお、類似例に名古屋城三の丸遺跡S B217・223

・220がある。特にS B220は住居の北辺の円形に膨らんだ場所から、穴が掘られ角柱状の石が縦に据えられている例は、大毛沖S B07例に近い。

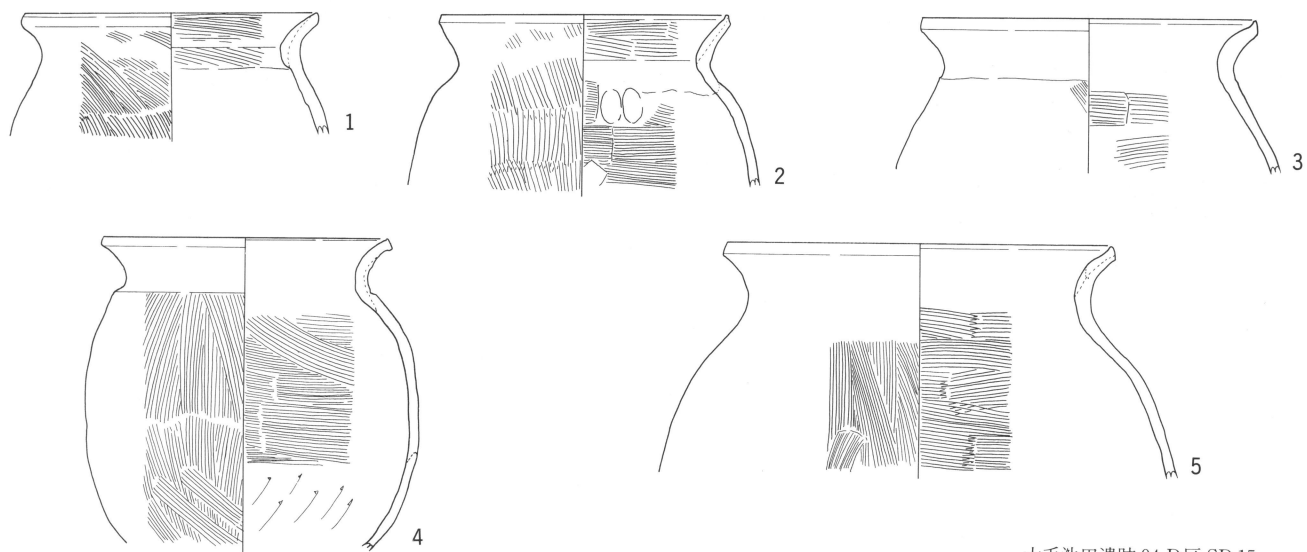
今回は7世紀半ば～11世紀初頭を大きく5段階に区分した。細分の可能性も考えれば10段階区分まで行える。今後の展望としては、須恵器・灰釉陶器との相伴関係、器種構成などを再検討し、改めて時期設定を行いたい。

小稿を成すにあたり、須恵器・灰釉陶器の編年観について斉藤孝正氏にご教示いただきました。また、城ヶ谷和広氏、(財)愛知県埋蔵文化財センター職員各氏にもご教示いただきました。

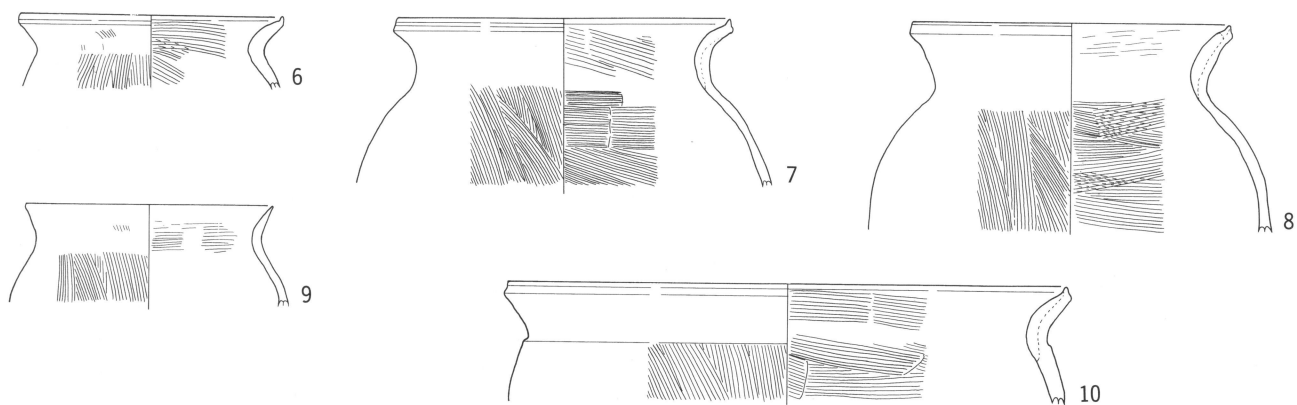
記して感謝いたします。

参考・引用文献

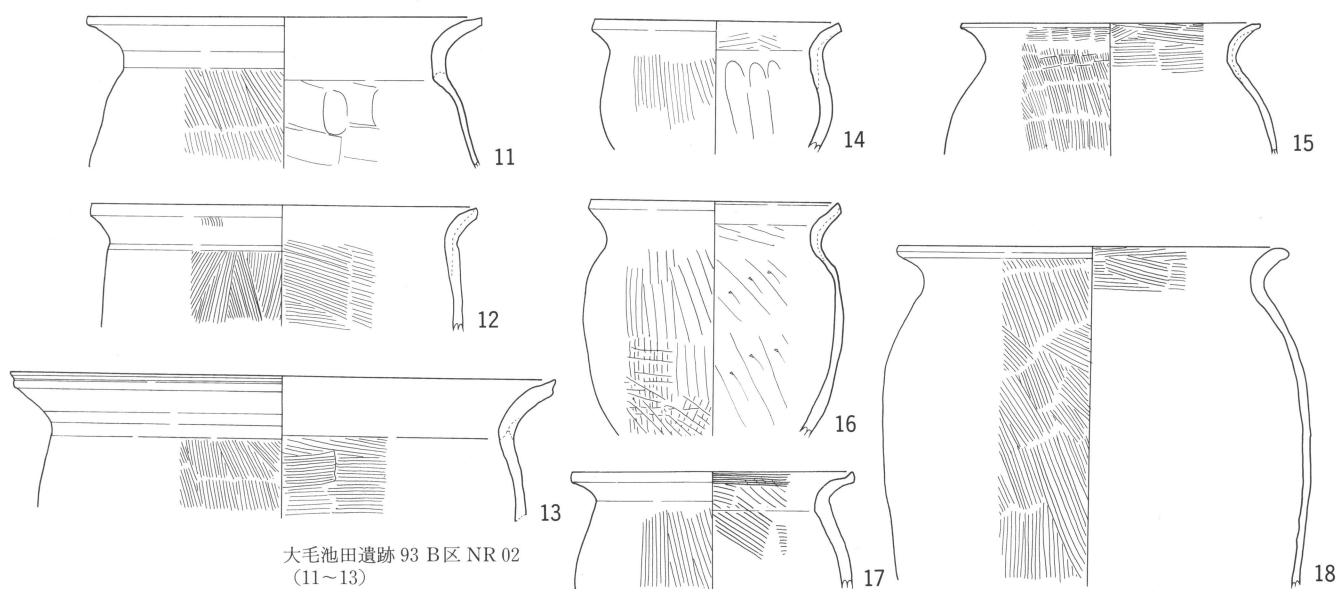
- 城ヶ谷和宏 「古代の土師器 ～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報 平成2年度』 1991
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『名古屋城三の丸遺跡(1)』 1990
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『清洲城下町遺跡』 1990
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『大淵遺跡』 1991
- 城ヶ谷和宏 「尾張における7世紀から9世紀半ばの須恵器」『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東2須恵器一』 1993
- 渡辺博人 「美濃須衛窯跡群の須恵器」『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東2須恵器一』 1993
- 斉藤孝正 「東海地方の施釉陶器生産 一猿投窯を中心に一」『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東3施釉陶器一』 1994
- 外山政子 「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ッ寺Ⅱ遺跡』 1991



大毛池田遺跡 94 D区 SD 15
(1~5)



大毛池田遺跡 94 C区 SD 03
(6~10)



大毛池田遺跡 93 B区 NR 02
(11~13)

大毛沖遺跡 94 C区 SB 07
(14~17)

大毛沖遺跡 94 C区 SB 06
(18)

図3 1~2 段階土師器甕実測図 S=1/4

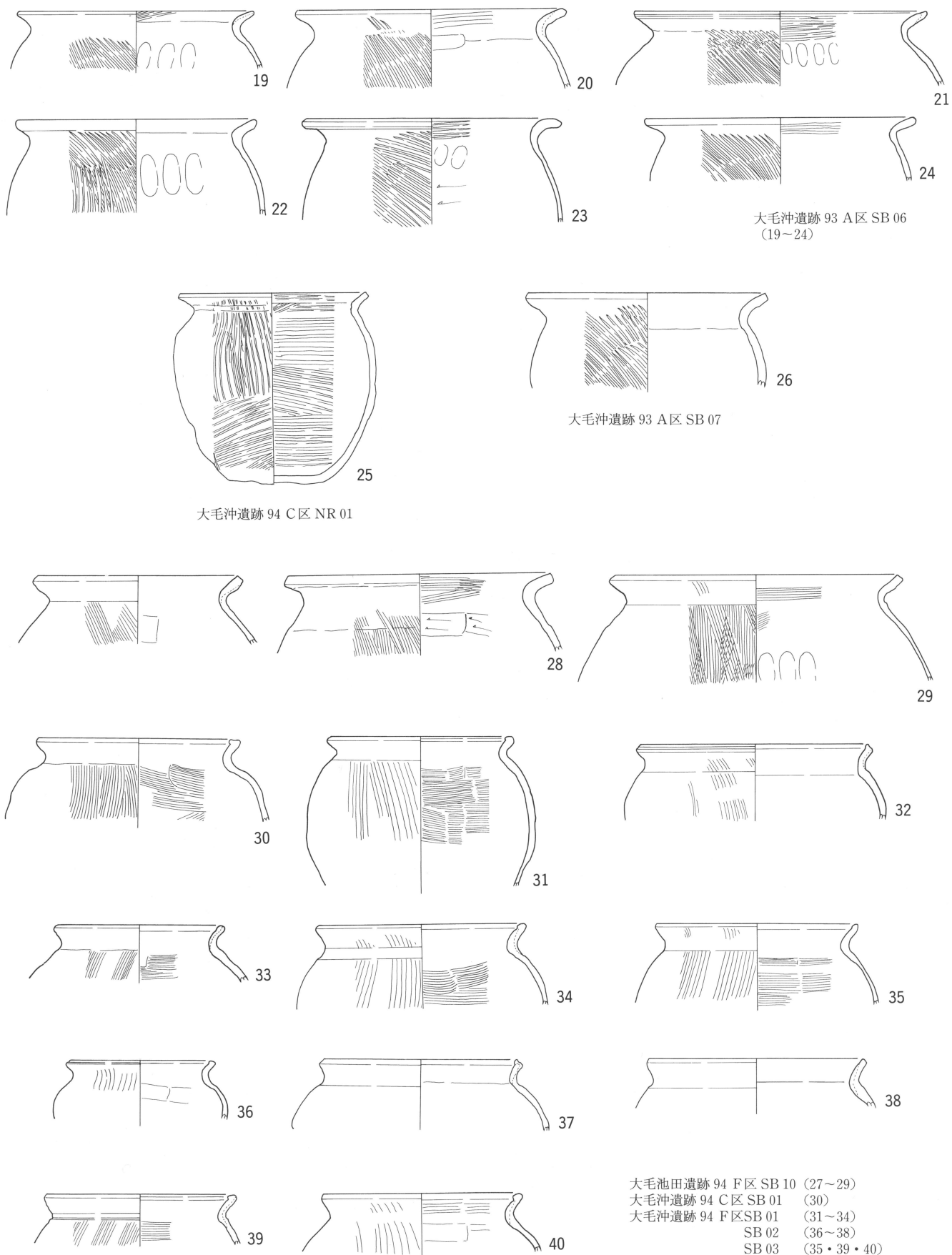


図4 3~5段階土師器甕実測図 S=1/4